

運動有能感の向上を活用した剣道授業の開発

学籍番号 (249327)

氏 名 (寫田瑞希)

主指導教員 (太田順康)

副指導教員 (森井亮和)

1. 背景

1.1 研究の背景及び目的

近年、青少年の体力低下や運動習慣の減少は社会的課題として指摘されており、文部科学省(2023)においても改善の必要性が強調されている。特に高校生期は、学業や進路選択などにより身体活動量が減少しやすく、運動に対して不安や苦手意識をもつ生徒ほど、運動から距離を置く傾向が見られる。このような状況に対し、学校体育においては、生徒が主体的に運動へ参加できる学習環境の構築が求められている。運動やスポーツを通して得られる達成感や自己効力感、運動への継続的な参加を支える重要な心理的要因であり、学校体育においても重視されている。この心理的側面を捉える概念として「運動有能感」があり、岡沢・杉原(1996)は、運動有能感を「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」の三因子から構成されるものと示している。先行研究では、体育授業における成功体験の積み重ねが運動有能感を高め、学習意欲や主体的な参加を促進することが報告されている。一方、高等学校保健体育科における剣道授業は、武道必修化以降、安全面や心理的負担への配慮が求められるとともに、技能習得の難しさや生徒間の技能差の大きさが課題とされている。実習校においても、生徒間での技能差が大きく、特に運動に苦手意識をもつ生徒が授業に消極的になる傾向が見られた。また、技能の到達度が分かりにくく、生徒が自身の成長を実感しにくい点も課題として挙げられた。

そこで本実践では、高等学校保健体育科剣道授業において、技能の到達度を段階的に示す昇級審査を、課題を細分化したスモールステップとして授業構成を導入した。素振りや足さばき、打ち込みなどの基礎技能を段階的に設定し、生徒が短期間で達成感を得られる学習過程を意図的に構成した。また、昇級審査は合否を目的とするものではなく、生徒が自身の学習状況を把握し、成長を可視化するための手立てとして位置づけた。

本研究の目的は、これらの授業構成を通して、生徒の運動有能感がどのように変容するかを明らかにするとともに、運動有能感を重視した授業づくりが、生徒の主体的な授業参加や技能差への対応、剣道に対する興味・関心の向上に寄与しうるかを検討することである。

2. 研究方法

2.1 研究対象及び調査方法

本研究は、高等学校第1学年3クラス(各6時間)を対象に実施した剣道授業を通して行った。

授業実践の効果を検討するため、単元前後に「運動有能感測定尺度を用いた質問紙調査(岡沢, 1996, 5件法・12設問)」及び「剣道に対する興味・関心調査」を実施した。得られた回答データについては、IBM SPSS Statisticsを用いて統計処理を行い、記述統計量を算出した後、剣道調査各項目と運動有能感各項目との間について、ピアソンの積率相関係数を算出した。有

意水準は5%および1%とし、相関係数 $r=.20$ 以上を一定の関連が認められる水準として結果の解釈を行った。毎授業後には、「学習感想の記録」を行い、KH Coderを用いて分析した。

3. 結果および考察

3.1 「運動有能感測定尺度を用いた質問紙調査」「剣道に対する興味・関心調査」相関関係

相関分析の結果、剣道に対する興味・関心と運動有能感との関連は全体として強いものではなかったものの、相関係数 $r=.20$ 以上の項目に着目すると、いくつかの意味のある関連が確認された。具体的には、剣道調査③は運動有能感③ ($r=.255, p<.01$) および運動有能感⑨ ($r=.212, p<.01$) との間に有意な正の相関を示した。また、剣道調査④は運動有能感⑦ ($r=.282, p<.01$) および⑨ ($r=.250, p<.01$) との間に正の相関が見られた。さらに、剣道調査⑥は運動有能感③ ($r=.255, p<.01$)、⑦ ($r=.201, p<.05$)、⑨ ($r=.216, p<.01$) との間に有意な正の相関を示した。

これらの結果から、技能の上達を実感する経験や、学習過程に主体的に関与することが、生徒の運動有能感、とりわけ統制感や受容感に関わる側面と一定の関連をもっていることが示唆された。剣道に対する興味・関心が、技能面だけでなく、仲間との関係性や授業の雰囲気など複合的な要因によって形成されることを踏まえると、本結果は妥当であると考えられる。この結果は、本実践で導入した昇級審査によるスモールステップの授業構成の有効性を裏付けるものである。昇級審査を設定したことで、生徒は自身の技能到達度を段階的に把握しやすくなり、上達実感を得やすくなり成功体験を積み重ねやすく、仲間との関わりを通じた受容感の向上にもつながっていたと考えられる。

「学習感想の記録」の分析は、授業回数が進むにつれて、「仲間との関わり」→「技能への意識」→「自分自身の成長」へと、生徒の関心や捉え方が段階的に変化していたことが、語の分析から明らかになった。

4. まとめ

本研究の結果から、昇級審査およびスモールステップによる授業構成は、生徒が技能の上達を実感しやすい学習環境を形成し、運動有能感の向上に一定の影響を与える可能性が示唆された。特に、技能の可視化や段階的な課題設定は、生徒に「できるようになっている」という統制感をもたらすとともに、仲間と関わりながら安心して取り組める受容感の形成にも寄与していたと考えられる。

また、本実践では、経験や技能の差にかかわらず、生徒一人一人が自身の成長を基準に学習へ取り組める構造を重視したことで、運動に苦手意識をもつ生徒においても授業参加への心理的ハードルを下げることができた。このことは、剣道授業に限らず、技能差が生じやすい体育授業全般においても有効な視点であると考えられる。

以上のことから、運動有能感を意識した授業設計は、生徒の主体的な学習態度を育成するとともに、運動やスポーツに対する前向きな意識を高める上で重要な役割を果たすといえる。今後の体育授業においても、生徒が段階的に成長を実感し、「できた」「認められた」と感じられる学習過程を意図的に構成することが、運動への自信や学習意欲を育てる上で不可欠であると考えられる。